

大平さんの先見性

渡辺 美智雄

大平さんと私の出会いは、大平さんが政調会長で、私が駆け出しの代議士の頃からでした。ある時、大平さんが「君は一橋だつていうじゃないか、学歴詐称じゃないの」とひやかされたことに始まります。また、大平さんが幹事長の頃、時々うかがつては俗事に花をさかせて大いに笑わせたものですが、大平さんは私に向つて「君はいつも二言多いね」というから「幹事長はいつも二言足りないんじゃないの」とやり返したこともありました。

大平さんは使命感に強く、非常に慎重で、ねばり強い人で、相手の言い分も十分に聞く寛容な人ですが、いったんこうと決めたらテコでも動かない人でした。失礼な話だが、人呼んで鈍牛なんて敬称を奉つたが、私は亀じやあないかといつたのです。攻撃されている間はじつと首を引つ込めて相手がくたびれるまで動かないが、細い目で周囲を見回し、相手にスキありと見るやノロノロどころか素早く前進します。日中正常化のときも、日中航空協定締結のときもそうでした。あのときの党内からの連日の攻撃は相当なものでした。元号法の制定、医師特別税制の是正等々、歴代内閣がとても手のつけられなかつた難物を処理してこられました。

大平さんがまん強いことはよく知られているところです。昭和五十四年秋の大平内閣による最初の総選挙後、思つたほど自民党が勝てなかつたということ、いわゆる四十日抗争が始まったのですが、大平さんはよくもがまんをして耐えぬきました。「総理・総裁分離論」とか「一年後の総裁選には再度立候補しないこと」などの妥協案が出ましたが、本筋については絶対に譲りませんでした。また、その翌年の五月、参議院選挙を控えて野党

の不信任案が提出されることになりました。大平さんはアメリカ訪問からチトー大統領の葬儀に参加して帰国した晩、私は大平さんに電話をして「十人程度党内から欠席者が出るかもしれないから、野党対策を講じておくこと。万一不信任案が通過した場合は、躊躇することなくただちに解散すべきこと」を進言しました。ところが一言「よし、わかった」といつておりましたが、私の予想を裏切つて、六十人もの欠席者が出て大差で不信任案は成立しました。壇上の大平さんは表情一つ変えず、加藤官房副長官を自席に招いてなにことかさやいていました。本会議が終るや否やただちに院内で臨時閣議を開き、さつさと解散の同意を万場一致でとりつけてしまいました。その電光石火の早業は鈍牛や鈍亀の批評とは正反対のもので、見事という外はありませんでした。憲法の定めるところによれば、不信任案通過後十日以内に内閣の身のふり方を決めればよいことになっておりますが、おそらく、一日解散の決定が遅れれば大平内閣は総辞職に追い込まれ、今日の衆参同時選挙による自民党の大勝は得られず、いまだに政局は混迷しつづけたことでありましょう。

大平さんは理想主義者であるとともに現実主義者でした。わが国の将来と財政の現状をいたく憂慮し、ことに財政の健全化に強い意欲を燃やしていました。だがこれは総論賛成、各論反対で非常に困難を極めることも見抜いていたのです。しょせん財源の調達は先進諸国で広く用いられている付加価値税的な一般消費に着目した間接税しかないとみられたと推察されます。日の目は見ませんでした。移りゆく高齢化社会のなかで福祉政策を進めてゆくためには、大平さんの先見性は少し長い目でみれば必ず立証されるでしょう。大所高所からモノをみて、私利私欲を離れ、正直で人をだまさずだまされず、不要の敵をつくらず、芯を曲げず忍耐強く、媚びず媚を入れず、情熱に悶えながら他界されました。私の心残りにはベネチア・サミットに大平さんを送り、大平総裁の下で自民党の大勝を確認させてもらいたかったということです。

(大蔵大臣・第二次大平内閣農林水産大臣)